

# 地域子育てセンター「ゆりかもめ」の歴史 3

## ～ 「ゆりかもめ」の流儀 ～

### 3-1 市民を育てる「ゆりかもめ」



「ゆりかもめ」は施設の整備と共に、その運営面でも際だった成果を残してきた。先日、2009（平成21）年9月、三鷹市が全国に先駆けて作った有名な子育て広場、「はらっぱ」等の所長達2名が「ゆりかもめ」東清分館と「かくれんぼの森」を視察に見えた。「かくれんぼの森」が注目されるのは当然としても、「東清分館」がチエックされたのは光栄であった。ここは、1日の子育ての広場が終わる時、母達とその子供達が、廊下を雑巾掛けて帰るのだ。利用者が掃除をして帰る「地域子育て支援センター」は、全国でも珍しいだろう。「はらっぱ」所長達を感嘆させた、東清分館の習慣は一朝一夕に出来たものではない。

### 3-2 「ゆりかもめ」の暗中模索

1995（平成7）年5月落成・開所式を終えた「ゆりかもめ本館」は社会館保育園園庭の中にある、非常に魅力的な施設ではあったが、いつでも人を集めるには、十分な駐車場がなかった。当面できることは、電話での相談と、個別の母子に対する子育ての相談援助、当時流行っていたおもちゃの貸し出し事業位かと私たちは考えていた。

しかし肝心の電話が鳴らなかった。途方に暮れ始めていた時、平野指導員が言った。「ここで待っているより、こちらから出かけていきましょうよ。」「【偶然その12】この積極的な発想が、有り難かった。6月、早速公園での出張保育「青空保育」（後に「青空クラブ」と名称変更。）が始められた。木更津駅東側の「稲荷森公園」に、毎週火曜日午前10：00から11：30まで2人の指導員が出張した。これが当たった。「では」ということで駅西側の北片町公園と2ヶ所で「青空保育」を実行し始めるのは、7月。秋には、清見台公園ついで、畑沢の板取公園と4ヶ所の市内の公園で青空クラブが出そろうまで1年を要しなかった。指導者も主任三橋、副主任平野の他に、白石恵美子・渡部宣子の2名を加えて4人体制で毎週火・木の午前中2ヶ所ずつ青空クラブが並立することになった。ワゴン車等で屋外用のおもちゃを運び、新しくデザインされた幟数本を指導員達が公園に立てると、どこからともなく親子が集まってきた。

3年が経過。稲荷森公園に余りに人が集まりすぎて、近くのアパートにお住まいの3交代勤務の方々から「うるさくて眠れない。」という苦情が出始めた。周辺道路が、母子の車の駐車で占領されることも問題になった。「ピンチはチャンス」。私たちは、苦情をキッカケに、請西の八崎公園（後に、むつみ保育園の運営に任ず。）に会場を移すことにした。そして、稲荷森の失敗を繰り返さないため、多くの利用者が集まる清見台中央公園の駐車場の状況を再検討。公園近くの清見台ホール様に大駐車場の開放をお願いした。清見台ホール代表八幡有三氏はこれを快諾【偶然その13】。かくして清見台中央公園には、木更津のみならず近隣の4つの町から、その楽しそうな噂を聞いて、毎週多数の親子が集まることになるのだ。多い日で100名を超す親子が、公園全体に広がり、時に砂場に集まって賑やかに遊んでいる風景は、普段、閑散としている中央公園の光景を見慣れている地域の人々の注目を引いた。

### 3-3 「母達におもねらず」しかも母達の自発性を重視



「青空保育」は、平野指導員が主になり、社会館流の保育を中心に据えて、子供達を生き活きと遊ばせることを第1目標に置いた。社会館流とは、水と泥での遊びを重視し、時に喧嘩を容認しようとするもの。最初、驚き、反発していた母達は、泥水につかった子供達のキラキラと輝く幸せ感を見せられて、その考えを変えていった。一方指導員達は、温かく痛快な幼子達のはしゃぎ振りを通して、逆に窒息しかかっている母達の窮状を際だたせていった。

「ゆりかもめ」の活動が広く市民父母達の支持を受け、後年「木更津こども祭り」の大盛会につながる原因は、「母達におもねらず、社会館流を中心に据える。その上で、母達の自発的な自己変革・成長の体験を大切にす。」という青空保育指導員達的意思統一にあった。他の地域の子育て支援センター、その公園保育がうまく行かない理由は、母達が「現状維持のまま、自己のレベルを超える体験を出来ないでいるからだ」と私は推定している。

「母達の自己肯定感が低いことが問題で、これを直すには、まずは母達の現状をそのまま受け容れること。」という方策はその通りである。が、「未来のない今は腐る」。「現状肯定でホッとした時、彼女はもう未来を予感できていなければならないのだ。」と私は考える。保育の専門家が、母達の未熟な保育観をそのままに放置するのは、余りに安易、無責任だと私は考える。もちろん野鳥たちのように、いつ逃げていってしまうかも知れない母達を指導するのは、実に難しい。この手法は「ゆりかもめ」指導員達によって、既に確立されていることであるが、15年前彼等は、慎重にも慎重を期して母達を誘導して行ったのだ。

### 3-4 いつでも母達が集える広場（駐車場つき）が完成

開設当初から、20坪の「ゆりかもめ」本館は、多数の人を一度に集める余裕を持たなかった。公園での青空保育にスタッフが熱心に取り組んだのは、この弱点の故であった。電話相談、育児講座、初産の



お母さんとその赤ちゃんのための「ミニオフ」、一時保育そして4ヶ所での青空保育等を9名のスタッフで運営しながら、それなりの成果を上げ地域の信頼を勝ち得てきて8年。

2003（平成15）年5月「ゆりかもめ」寺町分館が公式に披露開館された。【偶然その14】ここに30台分の駐車場を持ち、60坪の広さを備えた地域子育て支援センター分館が用意された。いつでも望む時に母達が集える広場。ゆったりと幼子を遊ばせながら、情報交換が出来る町の中

の独立施設、待望の「室内の集いの広場」であった。ここに再度、三橋保育士が「ゆりかもめ」主任に登用される。

三橋京子保育士は「ゆりかもめ」発足の時、「ゆりかもめ等要らない。社会館は保育園だけでよい。」という、副園長以下園内職員の反発の空気の中で、孤軍奮闘してくれた指導者であった。その後、木二小学童保育所「ポップクラブ」が崩壊の危機に瀕した時、社会館小めだか組の担任を兼務したまま、「ポップ」の主任になって、「ポップ」崩壊防止の役を果たし、子供達の人数減少を27名で押しとどめてくれた功労者であった。「ゆりかもめ」寺町分館の開館は、8年前の様な逆風の中ではなかったが、やはり

「道なき原野に道を造る」仕事であった。所長宮崎の抽象的な構想を、どのように具体化するかは、三橋を中心とするスタッフ達の構想力と人脈と実行力に掛かっていた。